



Title	『和泉式部物語』の語り手：「草子地」と「視点の融合」の検討を通して
Author(s)	岡田, 貴憲
Citation	国語国文研究, 141, 17-31
Issue Date	2012-02-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93231
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_141-17-31.pdf



『和泉式部物語』の語り手

——「草子地」と「視点の融合」の検討を通して——

岡 田 貴 憲

一 はじめに

『和泉式部日記』を巡って一時期繰り広げられた、自作・他作論争と日記・物語論争。常に運動的に論じられてきた両者だが、もとより明確な外部徴証なしには断定するべくもない前者が「おそらく自作であろう」という消極的な結論で一応の決着をみたのに対し、後者については近年とみに再論の気運が高まっている。

三条西家本『和泉式部日記』の登場以降、日記としての扱いが定着していく中で年々マイノリティと化していた物語説の立場から、新たに発表されたのが加藤昌嘉氏による「作り物語のエレメント」である。加藤氏は同論考において、現存する作り物語に共通するエレメントの一つとして「客観カメラ」に徹するナレーターの存在を抽出し、それが「物語と日記とを截然と分かちエレメントとなる」として、「客観カメラ」によって語られる『和泉式部日記』を日記で

はなく物語として捉えるべき旨を説くと同時に、「歴史上の実在人物の和歌を核とし、客観カメラによって場面を形成する」という物語に共通の特徴を『和泉式部日記』が有することから、以後この作品を「歌物語の範疇に入れ」、「『平中物語』『篁物語』『多武峯少将物語』『西行物語』の系譜の上で考察することが求められる」と述べた。

一方、マジョリティたる日記説の立場からは、藤川晶子氏の「『和泉式部日記』は一人称作品⁽²⁾」が発表されている。藤川氏は、鈴木一雄氏によって提唱された超越的視点の概念を下敷きにしつつ、鈴木氏が「一人称と三人称の融合体」とした一人称の問題を批判的に検討し、逢瀬の場面に集中している「女」という三人称は、あくまでも主人公の「女」としての側面を強調する表現として機能しており、それが作品全体を貫く一人称とも抵触しないことを述べた。すなわち、『和泉式部日記』は「一人称で語られた、一人称を原則とする作品」であり、「時に自らの「女」としての場面を客観的に描き出したことに、斬新さがある」というのが、藤川氏の主張である。

両者の間には直接の論争が行われているわけではないが、藤川氏の説くところは実質的には場面に参加する語り手の存在であり、「客観カメラ」の存在を説く加藤説との対立関係を成している。

さらにこの両者は、ともに山口仲美氏の論『和泉式部日記』作者の意図——「物語」をめざして——³⁾に對する言及を備えている点でも一致している。

同論は、『和泉式部日記』が群書類従本によつて受容されていた頃に主流であつた「三人称で書かれた短編小説」という把握が、さきに述べた三条西家本の登場によつて片隅へと追いやられていく中、この作品を物語として捉えることの妥当性を説いたものである。山口氏は、『和泉式部日記』冒頭の無主語の文体が『堤中納言物語』中の一篇「花桜折る少将」の冒頭文と同じ構造をとっていることを指摘するとともに、『和泉式部日記』における一人称的叙述は『源氏物語』における語り手と登場人物との視点の融合に類するものであるとし、この作品が物語への志向という執筆意図の下に書かれた作品であると述べた。この論考に対しさきの加藤論文が賛同を示す一方で、藤川論文は否定的な検討を加えており、両者の対立点がここにも見出される。

その山口論文が、「物語」を意図した作品であつたと考えれば、ならん特殊な説明原理を持つてくる必要もなくなるのではあるまいか」として棄却するのが、藤川論文の下敷きとされている超越的視点である。超越的視点は主人公の眼の届かない範囲が描写されていることについての説明原理であるから、「客観カメラ」の存在を説く加藤論文も、実質的には超越的視点への反論を形成していると言つ

てよい。山口論文の可否を問い、加藤論文と藤川論文とを天秤に掛けるためには、この超越的視点自体の検証が不可欠であると言える。

二 超越的視点への疑問

鈴木一雄氏が提唱し、現在『和泉式部日記』研究上のキイ・ワードとなっている超越的視点であるが、鈴木氏はこの概念についての定義を一括して示してはならず、『全講和泉式部日記』⁵⁾を含む著作物の中で随時言及しているため、その定義には微妙な変動が見られる。しかし、その中でも根幹となる部分については次の一節から把握することができる。⁶⁾

『日記』のはじめ、小舎人童が帥の宮の使者として初めて「女」をおとずれるくだりで、彼は「女」の和歌を持つて宮邸に帰ることになるが、そこで場面が一転している。(中略)場面は「女」の眼をはなれて宮邸に移る。視点が移動している。これは、たしかに主人公の見聞の外まで経験性をもつて書かれているということであろう。(中略)しかし、視点の移動したその結果はどうか。帥の宮は「いかに」とたずね、「女」の和歌に返歌し、小舎人童に他言をいましめる。それだけである。それは小舎人童の来訪をうけた瞬間から「女」に予想できたことであろう。視点は移動しても、なお「女」の眼のどごく範囲にあるのである。いいかえれば、「女」の視点の延長線上に移動したにすぎないといえるのではないか。(四七七頁)

『和泉式部日記』の中に、主人公の眼の届かない範囲が、あたかも主人公が直接見ているかの如く描かれている箇所が存在することについて、鈴木氏は「視点が移動している」としつつも、それが限定的であることを述べる。鈴木氏の言葉を借りれば、そこに書かれている内容はすべて「女」に予想できたことであり、「女」の眼のとどく範囲にある「事象に留まっているのである。そのため主人公とは別の視点を設定する必要はなく、すべて「女」の視点の延長線上」で起こった出来事として処理される、というのが鈴木氏の主張である。

ここで注意すべきは、鈴木氏が「推測」ではなく「予想」という言葉を選んでいる点である。鈴木氏の表現からは、描かれている内容が主人公の単なる空想などではなく、すべて実際に起こるべき事象である、という含意が汲み取られる。

そしてこうした理解こそが、自作・日記説にとつての最大の論拠となっているのである。さきの藤川論文も、主人公の眼が届かない範囲の描写について「その内容は和泉式部自身が知りうる範囲にとどまっており、それ以上の発展性はない」「語り手」と一体化した「私」の視点から、帥宮の周辺に起こった事象を一方向的に描いているだけなのである」と述べている。和泉式部が本来知り得ない範囲での事象について、女房や童、あるいは帥宮自身から得られる情報を元に、推量や伝聞といった形式を省いて描いただけであり、だからこの作品は他者が創作した物語ではなく、自作の日記なのである、というのが、自作・日記説の主張する所である。

しかしこうした主張は、論理面において破綻していると思われる。

仮に、『和泉式部日記』の作者が和泉式部であり、そこに書かれている内容が女房・童・帥宮を情報源とするものであったとしても、作品の形式が日記であるか物語であるかは、全く別の話である。それは、作中人物としての女が、その作中場面において行動範囲より外の情報を得ることができたか否か、という問題においても変わらない。『和泉式部日記』が日記であるか、物語であるかを決定づけるのは、執筆あるいは主人公が事実に基づく情報を所持していたか否か、ではなく、それがどのように書かれているか、という形式上の要素なのである。

このように考えると、「客観カメラ」の有無によつて日記と物語とを分かつ、加藤氏の方法は極めて有効であると言える。そして超越的視点がその根幹において抱える問題が顕在化するのに併せて、藤川論文の主張が揺らぐことになる。

また鈴木氏は、超越的視点とともに、のちに藤川氏が批判する「一人称と三人称の融合体」という認識を提示し、その両者を統括する「主体の転換」という原理を持ち出す。

第三人称的叙述の問題——主人公を「女」とし第三者的にあつかっている点——などは、たいへん徹底なものであつて、表面には第三者として客観的に投げ出しているかのようにみえて、じつは第一人称としての「女」の心の範囲をそのまま第三人称「女」のかたち置き換えているに過ぎないところが多く、むしろ「私」の意識を底流とした主客未分の叙述ともいえるものである。(中略)「意識の流れ」にそつた、三人称とも一人称ともつかぬ叙述ということは、見かたをかえれば作者の心理的秩序を

根底とし、その秩序にそってきわめて自由に主体の転換がおこなわれてゆく書きかたといえるものである。主体の転換によって心理の陰影を微妙に写し出してゆくのである。主体の転換の自在という点では、超越的視点——作者が直接眼のとどく範囲を超えて、主人公の見聞の外まで経験性をもつて書かれること——の問題でも同じことである。（四九頁）

鈴木氏によれば、「主体の転換」とは「和歌の発想のしかた、形象のしかたに關係する」ものであり、特に和泉式部のような歌人の場合には「抵抗のない、自在な叙述態度」であつたらしいが、ここの主張もあまりに根拠が薄弱である。「第三人称「女」のかたちに置き換えているに過ぎない」と鈴木氏は言うが、そもそもそのような人称の「置き換え」は『蜻蛉日記』や『更級日記』等の日記文学に例を見ない上に、先に述べたように、その「かたち」こそが日記か物語かを決定づける一要因として機能してくるのであつて、いかに作者が自らを主人公とし、自らの心の範囲を描いていたとしても、その前提は動かない。

そして、藤川氏の主張はここでもまた根底から揺らぐことになる。ともに「主体の転換」に起因するものと説明される超越的視点と主客未分の叙述のうち、前者を採用する一方で後者を否定する藤川論文は、自己矛盾をきたしていると言わざるを得ない。作品全体を一人称で書かれたものとみなす藤川氏の説に則れば、「主体の転換」という原理自体が無用となり、それは超越的視点の支持基盤を否定することにも繋がってくるからである。

こうした矛盾が起ってしまうのは、他でもない鈴木氏の説明原

理が問題を抱えているためである。鈴木氏としては、超越的視点では説明の付かない三人称の問題を説明するために「主客未分の叙述」という認識を産出したのであろうが、いかにそれらを統括する原理として「主体の転換」なるものを置いたとしても、もともと一つの原理によって説明可能な二つの現象を、個別に扱うこと自体が無理だったのである。その原理とは、まさに加藤氏が指摘された「客観カメラ」の存在である。主人公の眼の届かない範囲が描写されていることと、主人公が三人称で客観的に描写されていることは、ともにこの「客観カメラ」の存在によって、同一の原理の下に説明されることになる。山口氏がいみじくも指摘するように、「あくまで「日記」と見ようとするから、「超越的視点」なるものを設定しなければならなくなる」わけであり、「客観カメラ」によって語られる物語としてみれば、鈴木氏の考案するような「特殊な説明原理」は不要になるという理屈である。

これまで「和泉式部日記」が自作の日記として扱われる際には、鈴木氏による超越的視点の概念がほぼ無批判の状態で享受され、作中の日記的でない記述を説明するのに最適な原理として、鈴木氏自身の思惑とは無関係に称揚されてきた。しかし、近年秋澤互氏が『和泉式部日記』の視線——超越的視点の再吟味を通して——⁽⁸⁾において述べたように、「自作、他作ということが争点から失せた今、我々は晴れて虚心坦懐にこの件の再吟味を行うことができる」のであり、まさにこれまでの「和泉式部日記」研究の代名詞ともいえるべき超越的視点に対し、「厳しい検証の目」が向けられなければならないのである。秋澤氏自身も同論考において、鈴木氏が超越的視点による描

写の内容を「大体見当のつくもの」と述べたことに對し否定的な態度を示すとともに、「女」の視点の延長線上のできごとに経験性が發生するメカニズムに疑問を呈している。超越的視点のみならず、鈴木氏の所説の根底にある「主体の転換」なる原理に対しては今後さらに検証が加えられていかねばならないけれども、秋澤氏によって提示された問題点を参照し、それに本稿がここまで指摘してきた問題点を考え合わせることで、鈴木氏の主張を継承してきた現在までの自作・日記説がいかに輕佻であつたかが、この段階でも充分に理解されるのではないだろうか。

三 従来の「草子地」認定とその問題点

かくして、日記説への疑念が強まることによつて、現在はマイノリティである物語説が自ずと有力になってくるわけだが、その場合でも『和泉式部日記』を物語として扱うためには相応の根拠が必要であることは言うまでもない。そこで筆者は、物語における語り手の客観視点を明示化する表現の一つとして、「草子地」の存在を取り上げたいと思う。

元来『源氏物語』古注に見られる用語として知られていた「草子地」であるが、現在では広く物語における分析用語として定着している。さきの加藤論文も、「ナレーターが作中世界に対して感想を漏らすことは、ままある」と述べ、「語り手の評言」とも呼ばれるこの概念に言及している。その具体的な内容については、中野幸一氏による次の定義が参考となる。

物語の地の文において、感想・注記・批評・説明など、作者と思われるものが物語の表面に出て、直接発言している部分、あるいは読者を意識した作者の姿勢が認められる部分を草子地という。

ここで中野氏は発言主体を「作者と思われるもの」とするが、これは「ナレーター」「語り手」に置き換えても差し支えない。重要なのは、その発言主体が場面には決して参加せず、場面を客観的に見つめながら、登場人物とは異なる次元から発言している、という点であつて、中野氏の言葉を借りれば「物語の表面に出て、直接発言している部分」を注視すればよいことになる。

さて、加藤論文によれば、日記と物語との違いはナレーターが「客観カメラ」に徹しているか否かにあり、「日記においては、カメラであるナレーター（作者らしき女）が、場面に登場して、話したり動いたりする」のであるから、場面の外で語られる「草子地」は日記においては成立しないことになる。事実、『蜻蛉日記』を初めとする女流日記に「草子地」らしき記述は見当たらず、またそれらの作品に「草子地」を認める意見も寡聞にして知らない。

それに引き換え、問題の『和泉式部日記』においては、「草子地」とみられる記述が確かに存在し、それに対する指摘も少数ながら発表されている。

その先駆けとなつたのが野村精一氏である。氏は『新潮日本古典集成 和泉式部日記／和泉式部集』(以下『集成』)の解説で、『和泉式部日記』を「日記文学」としてではなく、長く『和泉式部物語』として読まれてきたこの作品を、生の形で読みといてみる」ことの

必要性を説いており、ニュートラルな視点からの注釈を試みる過程において、作中の三例について「草子地」認定を下している。

ついで今井卓爾氏が『和泉式部日記 訳注と評論』(以下「訳注と評論」)において「この作品の作者は、物語作者として、宮寄りの目よりも女寄りの目を通して描出していることが多いために、日記作者の姿勢に類似しやすくなっている」と述べ、基本的には物語説に傾きつつも、「和泉式部日記」には、広く言えば地の文、やや狭く言えば草子地と考えられるところが点在しており、作品の性格づけの上からある程度参考にする事ができる」として、野村氏同様の立場からの指摘を行った。今井氏は作中の六例について「作者の見解」「作者の目から見た筆」といった言葉で評しているが、これらは実質的に「草子地」認定とみなしてよいと思われる。

右の両氏は、日記説とも物語説ともつかぬ、中立的な視座からの「草子地」認定を行っている点で共通している。それに対し、大野裕子氏の論『和泉式部日記』の「草子地」について⁽¹²⁾、そして本稿ですでに幾度も言及している山口仲美氏の論考は、ともに物語説を志向しており、野村・今井の両氏とはやや異なる位置にある。だが、山口氏が作者の問題を保留する一方で、大野氏は初めから自作説を前提としている点、扱いに注意を要する。

『和泉式部日記』には、物語の「語り手」にあたる存在を示す叙述は一切ないと言われる大野氏は、それに代わる存在として「眺め手」なるものを仮定し、その「眺め手」による作中人物への批評を、「草子地」とも「作者の感情を地の文に表出している」ともとれる箇所」として「超草子地」と呼称する。作者は「超草子地」を

用いることで読者による日記としての解釈を誘導するよう試み、結果「日記(文学)」の様式を持つ物語が成立することとなった」というのが大野氏の主張である。大野論文においては、作中の記述三例が「超草子地」として抽出されているほか、作品末尾の一文のみが、作者が「日記の体裁を解」いたことを示す純粹な「草子地」として認定されている。

対して、本稿第一節で確認したように積極的な物語説に立つ山口氏は、語り手として「和泉式部と同じような女房クラスの間人」が設定されていることが敬語の用法から帰納されるとし、登場人物への批評三例を、『源氏物語』における語形上の類例とともに例示した上で、「源氏物語」の草子地と同趣の評言」と認定する。さらに氏は、そのような評言を主人公の言葉として捉え「読者として思わず苦笑する」と評する清水好子氏の論を引き合いに出し、「物語」に設定された第三者的な語り手の言葉となると、なんら違和感が生じないのである」と言う。日記説に対するこうした批判を併せ持つ点が、山口論文の特徴である。

このように、「草子地」の存在を認めるという点では一致している四氏の論であるが、立論の前提、「草子地」の認定箇所、そして「草子地」の存在意義をどこに求めるかといった根本的な論点において振れ幅が大きいことが確認されよう。この事実が、単に各論を統合するだけでは『和泉式部日記』における「草子地」全体像の把握は不可能であることのみならず、批判を交えない安直な議論は破綻を招く一方であることを示している。よってまずは、四氏の論が抱える問題点を炙り出し、俎上に載せることが先決となる。

まず、野村氏が『集成』において「草子地」認定を下した三例について見てみよう。

【例1】

れのわらはきたり。「御ふみやあらん」と思ほどに、さもあらぬを、「心うし」と思ふほども、すきぐしや。(五ウ六オ)¹⁹⁾

【例2】

(上略)などいふ程に、れのつれぐなくさめてすぐすぞ、いとはかなきや。(五〇ウ五一オ)

【例3】

うへの御かたの女房ゐでいて物みるに、まづそれをば見て、「この人をみん」とあなをあげさはぐぞ、いとさまあしきや。(五三ウ)

これらについて野村氏は順に「作者として第三者の立場で批評した言葉。物語における草子地に当る」「草子地。作者の作中人物批評」「草子地的語法。作者の批評」と注を付しているのであるが、何故この三例のみを選び取ったのかについては、野村氏は何も述べていない。なお大野氏・山口氏は【例1】を、それぞれ抽出しているが、今井氏はいずれも抽出していない。

ここで今度は、大野氏が【例1】以外に「超草子地」と認定する二例について見てみよう。

【例4】

しばくおはしまして、ありさまなど御らむじもてゆくに、世になれたる人にはあらず、たゞいものはかなげにみゆるも、いと心ぐるしくおぼされて(下略)(三二オ)

【例5】

女、ながめいだしてゐたるにもてきたれば、あへなき心ちしてひきあげたれば、「(中略)」とあるに、猶物きこえさせたるかひはありかし。(二七ウ二八ウ)

大野氏は前者を「作者」和泉式部が、自己とは切り離して「女主人公」和泉式部を眺めている究極の例」と評し、後者を「二人の様子を眺めていた作者が、その事柄に対して(中略)すこし感動を覚えながら第三者的な立場から批評を加えている「草子地」である」と言うのだが、この両例に対する他の三氏からの言及は、全くない。つまり、作者による第三者の立場からの批評を抽出するという方針では一致している野村・大野の両氏においても、実際の作業は極めて恣意的に行われ、その結果としてこうした認定箇所の差異が生じているのであつて、仮に両者間で共通する例があつたとしても、直ちにそれを「草子地」と認定してよいかとなると、疑わしいのである。

特に問題なのが、自作説を根拠もなく前提とする大野論文である。「眺め手」「超草子地」といった呼称や「日記の様式を持つ物語」という把握は、いずれも自作説を前提とする関係で考案されたものと思しいが、そもそも純粹にテクスト上の問題として論じられるべき「草子地」の問題に作者論を巻き込むことは不要な混乱を招くだけであり、ゆえに大野氏は「自己とは切り離して」「和泉式部自身に対して、あたかも他人を眺めているかのよう」といった説明を強いられているわけである。作者の問題を保留して見た場合、右の【例4】は帥宮の心内語に含まれるべき範囲に他ならず、「草子地」とは認め

がたい。大野氏の認定は、作者「主人公」という前提に縛られたがための誤認と言わざるを得ない。山口氏のように作者の問題を分離しておけば、少なくともこうした誤認は予防でき、また「眺め手」等の不用意な概念も必要としないのである。大野論文は『和泉式部日記』に「草子地」を認めるという点においては評価すべきであるが、その内容は右のように採りがたいものである。

また、どの箇所を「草子地」と認定するか、という問題では、今井氏の『訳注と評論』についても議論を要する。今井氏が抽出する例を示すと、次の通りである。

【例6】

もともこゝろふかゝらぬ人にて、ならはぬつれゝのわりなく
おぼゆるに（下略）（三才）

【例7】

「北の方もーれいの人のなかのやうにこそおはしまさねどー夜
ごとにいでんも『あやし』とおぼしめすべし。こ宮の、はてま
でそしられさせ給しも、これによりてぞかし」とおぼしつゝむ
も、ねんごろにはおぼされぬめりかし。（六才〜ウ）

【例8】

「おはしまさんとおぼしめせど、うゐくしうのみおぼされて、
日ごろになりぬ。（六ウ）

【例9】

せんざいのをかききなかにありかせ給て「人は草葉の露なれや」
などの給、いとなまめかし。（一七ウ）

【例10】

あはれにものゝおぼさるゝまゝに、をろかに過にしかたさへく
やしうおぼさるゝも、あながちなり。（四一才）

【例11】

さらに御まへもさけさせ給はず、うへの御かたにわたらせ給こ
とも、たまさかになりもてゆく、おぼしなげく事かぎりなし。
（五三才）

作中の任意の記述が「草子地」であるか「地の文」であるかを「き
わめておおらかな判断」の下に認めていく今井氏は、四氏の中で最
多となる六例を抽出している。このうち【例7】【例10】については
山口氏も抽出しているが、他は今井氏のみが認定する例である。し
かし、その独自認定の箇所こそが問題なのである。【例8】について
今井氏は「初初しうは宮の心話ということはず、作者が推測し
た宮の心情である」と言うが、むしろここは「のみおぼされて」と
いう表示から宮の心内語と判断するより他ないのであつて、これを
否定する根拠が示されていない以上、今井氏の説は認めがたいので
ある。また氏は【例11】について「もつとも全般に目を及ぼすこと
ができるのは作者であるから、作者の目から見た筆とするのがより
適当であろう」と言うが、ここは語り手が純粹に客観視点に徹して
場面を描写しているものであるから、ごく普通に地の文とされるべき
箇所であり、特に「草子地」との関わりを押し出す必要はないので
ある。

こうした問題は、言うまでもなく「広く言えば地の文、やや狭く
言えば草子地」という、認定基準の曖昧さに起因するものであり、

「おおらかな判断」の所産であると言える。今井氏が「極端に言えば草子地は地の文ともみなすことができる」と言うのは本質的には正しいけれども、その逆説として地の文を草子地とみなすことは論理的に成立し得ないわけで、今井氏の如き判断から生み出される結論は、玉虫色以外の何色でもない。

このように、認定基準を示さない野村氏、曖昧な認定基準に拠る今井氏、認定に自作説の論理を持ち込む大野氏の論は、三者三様に問題を抱えており、その抽出する例も一部は「草子地」とは認めがたい。そうした中で、山口氏の論は唯一、曖昧さを排除することに比較的成功しているように思われる。それは言うまでもなく、立論の前提として積極的な物語説を採ることにより、明らかに語り手の感想として認められる箇所を「草子地」として認定しているためであり、かつ微妙な判断を迫られる箇所については断定を避け、『源氏物語』における語り手と登場人物との視点の融合例を適用して説明しているためである。

こうした先行例に鑑みれば、本稿の採り得る方法は自ずと一つに落ち着くであろう。すなわち、『和泉式部日記』中において通常は客観視点に徹している語り手が、明らかに場面の外で発話している例を収集し、それを中野氏による物語中の「草子地」の分類、すなわち「説明の」「批評の」「推量の」「省略の」「伝達の」各「草子地」に当てはめるのである。もともと、判断に迷う例は保留せざるを得ないわけだが、そうした例を除いても、語り手の存在を明示化する「草子地」を収集できれば、物語説の根拠としては充分機能するという論理である。

四 『和泉式部日記』の「草子地」と「視点の融合」

女が帥宮の言行を把握できないのは両者間に物理的な懸隔がある場合に限られるが、女と帥宮が近接している場合でも、帥宮の心内ばかりは女にとつて知るべくもない。だが『和泉式部日記』の語り手は帥宮の心内を易々と描写するのみならず、場面の外から感想を付加することがある。

【例1】（再掲）

「北の方もーれいの人のなかのやうにこそおはしまさねどー夜ごとにいでも『あやし』とおぼしめすべし。こ宮の、はてまでそしられさせ給しも、これによりてぞかし」とおぼしつゝむも、ねんごろにはおぼされぬなめりかし。（六〇ウ）

【例10】（再掲）

あはれにもものゝおぼさるゝまゝに、をろかに過にしかたさへくやしうおぼさるゝも、あながちなり。（四一オ）

【例12】

「おもひもかけぬにゆく物にもがな」とおぼせど、いかでかは。

（二三ウ）

【例7】と【例12】では帥宮と女の間物理的な懸隔があり、【例10】では両者が近接している。しかし、三例とも女からは知るべくもない帥宮の心内が描かれている点で共通である。その心内の描写が、「とおぼしつゝむも」「おぼさるゝも」「とおぼせど」の表示で完了した所で、傍線で示した感想が置かれる。これらの発話主体は、

場面の登場人物ではありえない。いずれも、登場人物とは別の次元にいる語り手が漏らした感想と見なければならぬ。これらは、中野氏の分類における「批評の草子地」のうち、「物語の登場人物の容姿・言動・心情などについての批評」とされる「人物批評」の「草子地」に分類すべき記述である。

こうした、登場人物の心内描写を承けて置かれる「人物批評」の「草子地」の例としては、『源氏物語』夕顔巻の、光源氏が初めて夕顔との一夜を過ごす場面における、

虫の声々乱りがはしく、壁の中のきりぎりすだに間遠に聞きならひたまへる御耳に、さし当てたるやうに鳴き乱るるを、なかなかさま変へて思さるるも、御心さしひとつの浅からぬに、よろづの罪ゆるさるるなめりかし。

（『源氏物語』夕顔巻／①一五七頁）¹⁵
という描写や、末摘花巻において、末摘花の器量を初めて目の当たりにした光源氏の様子を描く、

見ぬやうにて外の方をながめたまへれど、後目はただならず、「いかにぞ、うちとけまさりのいささかもあらば、うれしからむ」と思すも、あながちなる御心なりや。

（『源氏物語』末摘花巻／①二九二頁）
という場面、また『夜の寝覚』巻三において、寝覚の上が内侍督の参内に際し、それまでの奔走にも拘わらず後見役として付き添うことを憚る様子を描く、

また誰にか譲るかたなく、殿の上も添ひて参りたまふべかめれば、狭ければ、大皇の宮のときどき参らせたまふをりのおはし

まし所、弘徽殿の北面をしつらはれたり。上は「いかに」と、添ひて参りたまふをつつましくおぼせど、さりとてはいかでかは。

（『夜の寝覚』巻三／二四〇頁）
といった場面などがあり、『和泉式部日記』にみられる「人物批評」の「草子地」が物語のそれと同じ言い回しを採っていることが確認される。

また語り手は、帥宮の真意を量りかねて忖度することがある。

【例13】

ひと夜の空のしきのあはれにみえしかば、心からにや、それよりのち「心ぐるし」とおぼされて、しば／＼おはしまして（下略）（三一才）

¹⁶帥宮が女を自邸に迎え入れる考えを初めて伝える場面から抽出した例。ここでは「心ぐるし」という帥宮の心内に対して「心からにや」という感想が置かれているが、その発話主体が誰かは明白である。この場面がすべて語り手による描写であることが帥宮の心内描写の存在から判断され、「心からにや」も、その心内を語り手が忖度して述べた感想と考えられるからだ。中野氏の分類における「推量の草子地」のうち、「作者が物語中の事柄や人物の言動・心情などについて推量する場合、疑問的な形式をもつてする」と言われる「疑問的推量」の「草子地」にあたると言えるだろう。

さらに、帥宮の心内を忖度する語り手は、女についても客観的な描写だけでは飽きたらず、疑問の形で感想を漏らすこともある。

【例14】

つとめて、れいの「御ふみつかはさん」とて「わらはまいりた

りや」とはせ給ほどに、女も、霜のいとしろきにをどころかされてや、「(中略)」ときこえたり。(三三ウ)

【例15】

かくて、女、かぜにや、をどころ／＼うはあらねどなやめば、時々とはせ給。(四六オ)

右二例はともに「女」という三人称の表示から語り手の客観視点による描写であると判断されるが、その直後に疑問の形式をとる感想が置かれている。当然、この感想は語り手による発話としてみなされるはずであり、二例ともに中野氏の言う「疑問的推量」の「草子地」に分類すべきである。

こうした「疑問的推量」の「草子地」は、たとえば『平中物語』にみえる、

女、いかが思ひけむ、あひ語らひにけり。

（『平中物語』三二段／五一五頁）

のように、歌物語において頻出する表現であるし、作り物語にも、『源氏物語』桐壺巻における、桐壺更衣の後を追うかのように祖母北の方が逝去するさまを描いた、

かの御祖母北の方、慰む方なく思ししづみて、「おはすらむ所にだに尋ね行かむ」と願ひたまひしるしにや、つひに亡せたまひぬれば、また、これを悲しび思すこと限りなし。

（『源氏物語』桐壺巻／①三八頁）

という場面で、同種の表現がみられるのである。

以上の六例は、いずれも叙述内容や三人称表示から、客観視点をとる語り手による描写と判断される例であり、その中に「草子地」

が現れていることによつて、語り手の存在が一層明示化されているのである。

では、大野氏が抽出された次の例はどのように判断すべきだろうか。

【例5】（再掲）

女、ながめいだしてゐたるにもてきたれば、あへなき心ちしてひきあげたれば、「(中略)」とあるに、猶物きこえさせたるかひはありかし。(二七ウ／二八ウ)

帥宮に手習文を贈った女が、帥宮からの返歌五首を含んだ返事を受け取る場面。「女」という三人称表示から語り手による客観視点からの描写であることは【例14】【例15】と同様に自明であり、右で中略した帥宮からの返事が描かれる間もそれが継続していると考えれば、最後におかれる「やはり手習文を差し上げた甲斐はあったのだ」という感想は語り手のものでなければならぬ。

また、帥宮が女を初めて訪れる場面に次のような例がある。

【例16】

あやしき御くるまにておはしまいて「かくなむ」といはせたまへれば、女、いとびなき心ちすれど「なし」ときこえさせすべきにもあらず。ひるも御かへりきこえさせつれば、「ありながらかへしたてまつらんも、なさけなかるべし。ものばかりきこえん」と思て、にしのつまどにわらざしいでゝいれたてまつるに、世の人のいへばにやあらむ、なべての御さまにはあらずなまめかし。(四オ／ウ)

「いれたてまつるに」以下、帥宮と女が近接している状況ではある

が、「女」という三人称表示を見れば、こゝも客観視点からの描写と判断されるのであって、「うなまめかし」というのは語り手から見た帥宮の姿、その前にある「世の人のいへばにやあらむ」は語り手による感想と考えるべきである。

しかし、これらの例がさきに「草子地」と認定した六例と決定的に異なるのは、傍線部が語り手の感想でありながら、同時に登場人物の感想としても機能し、視点が融合している点であり、このような例こそが『和泉式部日記』を一人称の日記としてみなす立場が根拠としてきた所なのである。

これら二例と同様の例は、客観カメラによる描写と直ちに認めるに足る判断要素がない箇所に散見される。

【例1】（再掲）

れいのわらはきたり。「御ふみやあらん」と思ほに、さもあらぬを、「心うし」と思ふほども、すきくしや。（五ウく六オ）

【例2】（再掲）

（上略）などいふ程に、れいのつれくなくさめてすぐすぞ、いとほかなきや。（五〇ウく五一オ）

【例3】（再掲）

うへの御かたの女房ゐでいて物みるに、まづそれをば見て、「この人をみん」とあなをあげさはぐぞ、いとさまあしきや。（五三ウ）

【例17】

あはれにはかなく、たのむべくもなきかやうのはかなし事に、世のなかをなぐさめてあるも、うちおもへばあさましう。（二一

ウ）

【例18】

つごもりがたに風いたくふきて、のわきだちて雨などふるに、つねよりも心の心ほそくてながむるに、御ふみあり。れいのおりしりがほにの給はせたるに、日ごろのつみもゆるしきこえぬべし。（二四オ）

【例19】

このそでの事は、はかなきことなれど、おぼしわすれでのたふもをかし。（三三ウ）

【例20】

「げに、かれよりまづの給ひけるなめり」とみるもをかし。（三四ウ）

【例21】

いかにおぼさるゝにかあらん、心ほそきことどもをの給はせて「猶よのなかにはつまじきにや」とあれば（下略）（五〇ウ）このうち【例1】は山口氏が「草子地」と認定する例であるが、

果たしてそのように断定できるかという疑問である。むしろ【例

2】【例17】【例20】について「第三者的な語り手の視点は、しばし

ば登場人物「女」の視点と融合一体化している」と言う山口論文にあつては、【例1】についても同じ姿勢で接するべきであつただろう。

これらが、当該箇所をみる限りは判断を保留せざるを得ない例であることは、【例1】が野村・大野・山口の三氏によって「草子地」と

して認定される一方で、鈴木氏・清水氏によって主人公の自己批判とみなされていることから首肯される。山口氏が右のような態度

のぶれを見せてしまったのもそれがためであろう。

だが、「草子地」認定が保留されてしまうこのような例を「視点の融合」という論理に当てはめる山口氏の説明は、そうした態度のぶれとは裏腹に、きわめて有効と言えるのである。氏は『源氏物語』常夏巻にみられる

「耳固からぬ人のためには、身にしむ風も吹き添ふかし」とて押しやりたまふ、いと心やまし。」

（『源氏物語』常夏巻／③二二二頁）
という記述と、この箇所を「女君に傾いた語り手の感情が、草子地となつてあらわれている」とする池田和臣氏の論を引くことにより、これらの例が物語説における陥穽となることを回避したのであるが、こうしたタイプの「視点の融合」は、『落窪物語』において、継母から縫物の褒美として着古した綿入をもらう姫君の様子を描く、いとく清げに縫ひ出でたまひつれば、北の方、「よし」と思ひて、おのが着たる綾のはり綿の萎えたるを着せさせたまへば、風はただはやになるままに「いかにせまし」と思ふに、「少しうれし」と思ふぞ、心地の屈しすぎたるにや。

（『落窪物語』巻一／二六～二七頁）
という場面がみられることや、『狭衣物語』において、入道の宮の尼姿に自責の念を感じた狭衣が、出家を願ひながらも源氏の宮への思いゆえに葛藤するさまを描く、

今日明日と思ひ立ちたる心の中には、「いとどあるまじきこと」と思ひ離れたまへど、それにつけてしも、なほやすからずおぼえたまふも、我ながら心憂し。

（『狭衣物語』巻三／『新潮日本古典集成』下・一七二頁）

といった場面が存在することからも分かるように、むしろ作り物語においては一般的な手法として多用されていることが知られるのである。全知的な視点を持ち、登場人物に対して場面の外から客観的な感想を漏らすことのできる語り手であればこそ、登場人物の視点に融合することも可能なのである。さきに認定した「草子地」と、こうした語り手と登場人物との「視点の融合」とが『和泉式部日記』に併存していることは、この作品を物語として把握する上で、山口氏が言う以上に強力な裏付けとなっているのである。

思い返せば、鈴木氏の『全講』では、こうした記述を一人称で書かれた主人公の自己批判として捉える一方、さきに「草子地」と認定した記述を、他作品には例をみない超越的視点なる概念や、主体の転換なる原理によつて説明していたのであった。対して、山口論文が発案し、本稿が採る方法では、「草子地」も「視点の融合」も、物語に一般的に存在する叙述技法として具体例を挙げて説明できるのである。論証の手続きとしてどちらが適切であるかは、言うまでもないであろう。

五 おわりに

土方洋一氏はかつて山口論文に対する反論を行い、『和泉式部日記』の「草子地」と物語のそれとについて「テキスト全体を視野に入れば、その間の質的な違いが浮かび上がってくる」と述べていた。⁽²⁰⁾しかし、むしろテキスト全体を視野に入れた結果、前節でみ

たように歌物語・作り物語に共通する「草子地」や「視点の融合」の存在が確認されたわけである。「語り」の場」と「物語の世界」との間の距離という感覚も希薄である」という土方氏の指摘は、むしろ『源氏物語』特有の重層的な語りの構造に強く引きつけられた把握と考えられる。

『和泉式部日記』の作中場面と語り手との間には、確かに『源氏物語』ほどの距離はないかも知れない。しかし、そこに明らかな次元の差が存在することは否定できないのであり、それが加藤氏の言う「物語と日記」とを截然と分かつエレメント」として機能してくるのであるならば、やはり『和泉式部日記』は物語として扱われなければならないと言わなければならない。

また本稿では一貫して三条西家本『和泉式部日記』に拠って論を展開してきたが、それは現在の自作・日記説が揃ってこの本を底本としていることへのアンチテーゼに他ならない。この作品が日記として読まれていることの背景には、諸本中最善本と目されている三条西家本が、鎌倉期の文献に見られるのと同じ「日記」の題を持つことが少なからず影響しているが、たとえば『伊勢物語』『平中物語』『簗物語』『多武峯少将物語』がかつて『在五中將の日記』『貞文日記』『簗日記』『高光日記』とも呼ばれながら、現在は物語として扱われていることを思い合わせれば、『和泉式部日記』のみを例外とする謂れはないと言える。

この作品が写本の題として「日記」「物語」の両様を持つことはそれとして、現在のジャンル論の上では物語としての扱いを要求していることを、『和泉式部物語』における語り手の存在は雄弁に物語っ

ているのである。

注

- (1) 『国語と国文学』八六・五号、二〇〇九・五。
- (2) 『国文学（関西大学）』九一号、二〇〇七・三。
- (3) 上村悦子編『王朝日記の新研究』笠間書院、一九九五。
- (4) 与謝野晶子氏（『新訳和泉式部日記』金尾文淵堂、一九一六）、岡田希雄氏（『和泉式部（岩波講座日本文学）』岩波書店、一九三一）等。
- (5) 至文堂、一九六五。増補版は一九七一、改訂版は一九八三。
- (6) 以下、改訂版より引用し、頁数もそれに従う。傍線は私に付した。
- (7) 「座談会」日記文学をめぐって——研究の動向と未来展望——（『国学院雑誌』一〇三・一号、二〇〇二・一）において、超越的視点が「独り歩き」している現状への困惑が述べられている。
- (8) 『活水日文』四五号、二〇〇四・一。
- (9) 「源氏物語における草子地」（『源氏物語講座』一号、一九七一・五）、および「草子地攷（一）」（『早稲田大学教育学部学術研究』一七〇二〇号、一九六八・二）（一九七一・一二）。
- (10) 新潮社、一九八一。
- (11) 早稲田大学出版部、一九八六。
- (12) 『実践国文学』五二号、一九九七・一〇。

(13) 「和泉式部日記の基調」(『国文学(関西大学)』五四号、一九七七・九)。

(おかだ たかのり・北海道大学大学院博士後期課程)

(14) 以下、『和泉式部日記』の本文は藤岡忠美編『宮内庁書陵部蔵

伝三条西実隆筆 和泉式部日記』(和泉書院、一九八三)に拠り、私に句読点・濁点・鉤括弧・ダッシュ・傍線を付した。漢字・仮名の表記は底本のまま保存してある。

(15) 以下、散文作品からの本文引用は新編日本古典文学全集(小学館)に拠り、作品名・巻名・巻数・分冊番号・頁数を示した。句読点・鉤括弧の位置は私に改めた箇所がある。また、他の出典に拠る場合は随時明記した。

(16) 「空のしき」、他本では「空のけしき」となっており、底本の誤脱であろう。

(17) 「かくも帥の宮にひかれてゐる自分をまた「すぎずきしや」と批判もする」(鈴木『全講』九五頁)、「来ぬ男に焦がれる気持をみずから評する言葉」(清水前掲注(13)論文)。

(18) 「源氏物語の草子地についての一視角——その方法的意義——」(『中古文学』一八号、一九七六・九)。

(19) 『全講』収録の追補論文において、鈴木氏は『土佐日記』『蜻蛉日記』に超越的視点の「芽生え」を求めるが、氏自身が認めるように、『和泉式部日記』のような叙述との間には「大きい相違がある」。

(20) 「『和泉式部日記』の表現構造」(『日記の声域 平安朝の一人称言説』右文書院、二〇〇七)。